

「信仰の骨格を造ろう―信じ続けるために、祈り続けるために、愛し続けるために―」  
2023年2月23日 会場：堺教会 軽込 昇（隠退教師）

「福音主義教会連合関西部会」の活動に、わたしはそのごく初期から加わってきました。最初は、森里忠生牧師のかばん持ちよろしく、鳥羽のあらみ荘や加太国民宿舎などでの研修会のお手伝いをしているうちに、いつの間にか書記のような働きまで担うようになりましたが、正式に書記に任じられた、という記憶はありません。

特に、今年で46回を数えるCS教師講座では、現在まで続くスタイルを、森里牧師と相談しながら作り上げていきました。その後、わたしの体調の問題があり、お手伝いできなくなりました。ある年の教師講座の真っ最中、肺炎になり四週間入院しました。教会から、夜の集会の出席は控えて欲しいと言われ、残念ながら参加を断念しました。

わたしの願いは、日本の教会が真実の教会、すなわち、主イエス・キリストにしっかりとつながった教会であってほしい、ということです。

本日は、わたしの信仰がどのようにして形成されたかを手掛かりにします。いくつかのエピソードから話を始めます。

#### エピソード①

わたしは、1960年11月の最後の日曜日、初めて教会の礼拝に出席し、ぶつかるべき真実の神に出会いました。いえ、神の方から、わたしがお前の相手である、わたしに全力でぶつかって来い、と招かれた、と申し上げるべきかもしれません。

わたしの少年期は、頸椎カリエスのためにほとんどを病床で過ごしました。小学校2年生の三学期からは長期欠席者となり、以降学校生活はしたことがありません。その時の同級生は、中学校を卒業していきました。焦りがなかった、と言えばウソになります。何時、この病気が治るのか、治ったとしても遅れてしまった学校教育はどうなるのか、考えても答えは見つかりません。

その間、誰に対してこのいら立ちをぶつけたらよいのか、誰に対して祈ったらいいか分かりませんでした。いろいろな宗教の人がやってきました。拝み屋と称する人も来て、枕もとでお経や呪文を唱え、お前もこれを唱えろ、と般若心経も教えてくれましたが、心は動きませんでした。ラジオで「聖書通信講座」なるものを知り、受講したこともあります。聖書を読んだこともありましたが、心に響くものではありませんでした。

ストレプトマイシンという結核の特効薬のおかげで、病気が治り、ギブスをつけてですが、学校に戻れました。中学3年生に編入して貰い、高校にも進学できました。そのとき18歳になっていました。当初は、病気が治りさえすればすべてがうまくいくように思っていたので、天にも昇るような思いでした。しかし、いろいろな活動ができるようになって、かえって、心の中に何か隙間のようなものが生じてきました。

そのような時、たまたまクリスチャンを訪問して、これから教会に行くが君も行くかい？と誘われました。それがわたしの初めての礼拝出席であり、その礼拝出席が決定的でした。

その日、東京から来た偉い牧師さんの特別伝道礼拝でしたが、話はさっぱり分かりませんでした。しかし、わたしの遍歴はそこで終わりました。その礼拝で、わたしの責任

を取ってくれる方に出会ったのです。わたしがお前の全責任をとる、わたしにぶつかって来い、とおっしゃってくださる神に出会ったのです。洗礼を受けたのは、次の年のイースターですが、わたしの中では、最初の礼拝の時、洗礼を受けることは心に決めていました。次の週からの礼拝出席はほぼ皆勤です。

#### エピソード②

その教会には、高校生が何人も出席していました。土曜日の午後、高校生会と称して、牧師にあだ、こうだと、キリスト教への疑問をぶつけていました。疑問、というよりは、いちゃもんをつけていました。どんな質問をぶつけても、まだ三十代半ばの若い牧師は三つのことしか言ってくれませんでした。いわく、礼拝を守りなさい、聖書を読みなさい、お祈りをしなさい。その牧師からは、その三つ以外の答を聴いた覚えはありません。もちろん、この牧師からは多くの事を吸収しましたが、今考えますと、この三つを叩き込んでくれたことに対して、感謝の念しか思い浮かびません。

本日のわたしの話も、この三つのことを展開させたものです。この三つはそれぞれ、主イエス・キリストと結びつきます。本日申上げたい三つのこと、聖書を読みなさい、礼拝を守りなさい、祈りなさい、ということは、いずれも、主イエス・キリストと結びついてこそ、意味を持つてくることばかりです。そこに共通しているのは、どうしても顔を出す、人間的な思いとの戦いです。

#### エピソード③

洗礼を受けた日から、教会学校教師の補助者を仰せつかりました(高校2年生でした)。補助としてついたベテラン教師には鍛えられました。いえ、何も押し付けがましいことはありません。礼拝が終わってホッとしていると、「軽込さん、お祈りしましょう」と別室に連れて行かれます。「○○ちゃんのお父さんが病気です、いやしてください」から始まって、小学校3年生のそのクラスの一人ひとりの名を挙げて祈るその姿勢に圧倒されました。家庭訪問にも連れて行かれました。「あの子の吸っている空気をわたしも吸ってくるの」、それが彼女の口癖でした。

いくら補助といっても、生徒の前で話しをする機会があります。結局、それがきっかけとなって、高校を卒業したら牧師の道を目指すという考えが、次第に強くなっていきました。

#### エピソード④

教会に行く決めて最初にしたことが、町の本屋へ行って、聖書を買うことでした。何のためらいもなく、旧新約聖書を買ったのですが、礼拝に来ている人で、わたしのよう分厚い聖書を持っている人が少ないということに気が付きました。ほとんどの人が新約聖書だけなのです。中には詩篇付きの新約聖書もいましたが。

その頃は礼拝でも旧約聖書が読まれることはほとんどありませんでした。それでも、神学校入学前に旧約聖書を読むことはありませんでした。神学校の同級生には、牧師の子女が多く、聖書の物語をよく知っているのにショックを受けて、入学してまずしたのが聖書の通読です。

#### エピソード⑤

神学校に入学してしばらくして、母教会の牧師が辞任し、一年半の間、無牧になりました。朝の礼拝は、いろいろな牧師にお願いして説教していただいたのですが、夕礼拝までは手が回りません。長老会では、夕礼拝は休むとしたのですが、わたしから申し出て、夕礼拝の説教を担当させていただきました。二回、三回は何とかあったのですが、たちまち話すことがなくなってしまいました。いくら神学校にいても、高校を卒業したばかりの者には無理です。二進も三進も行かなくなり、とうとう、熊沢義宣教授に相談しました。教授はわたしの顔をじっと見て、「君は、君のために十字架にかかってくださった主イエスのことに驚きませんか?」「驚きです」「それなら、その驚いたことをそのままに話してごらん下さい」。話はそれだけでした。

#### エピソード⑥

もう一つ、その夕礼拝でのことです。日曜日の夕方、教会の鍵を預かっている長老の家に寄って、鍵を預かり、教会の扉を開け、電気をつけます。冬でしたからストーブに火をつけなければなりません。まだ石炭ストーブの時代です。そして人が来るのを待ちます。集るものはせいぜい5人か6人です。それでも集ってくればいいほうです。雨の夜は、とうとう一時間待っても誰もこない時がありました。仕方なく、聖書を読み、祈って、ストーブの火を落とし、電気を消して、玄関の鍵を掛け、その鍵を長老宅に届けます。そのようなことが5回か6回ありました。何とも言えない、寂しい、という言葉でも表現できない気持ちでした。牧師になる前に、その体験をしたことは、大きな恵みです。

その時、わたしの心に響いたのは、「わたしは初めであり、終わりである」という主イエスのお言葉です。この道を最初に行くのはわたしではなく、主イエスです。既にその道を主イエスが歩いてくださったのです。わたしが最後の始末をつけるのではありません。わたしの後を主イエスが歩いてくださるのです。

#### エピソード⑦

出身教会では、聖餐のパンと杯は長老（役員）が会衆席に運んでくる方式でした。東京神学大学の学生だった6年間は、文京区の西片町教会（鈴木正久牧師）に出席しました。メソジスト教会の流れを汲み、聖餐の時、受ける者は講壇の前（「恵みの御座」と呼ぶ）に跪いてパンと杯を受ける方式でした。初めて聖餐式に与かった時、新鮮な思いを抱きました。

ですから、月一回の聖餐式の時、その時間になっても前に出ようとしない人がいるなんて考えられませんでした。ましてやそれが同じ神学生であることは驚きでした。隣に座っている彼に、「出よう」と誘ったのですが、彼は「今日はぼくは受けない」という返事でした。言い争うわけにはいきませんので、わたしだけ前に出ました。礼拝が終わった直後から論争が始まり、帰る電車の中でも、さらに、寮に帰ってからも、彼との論戦は延々と続きました。

「何故、（聖餐を）受けない?」。

「今日は、おれはふさわしくないからだ」。それが彼の答えです。言うまでもなく、コリント一11：27「ふさわしくないままでパンを食し主の杯を飲む者は、主のからだを犯すのである。だれでもまず自分を吟味し、それからパンを食べ杯を飲むべきである」と関係します。彼によると、おれは今日はふさわしくないから聖餐に与からない、というのです。あげくのはては、「君は、自分がふさわしいと思っているのか」とまで言われてしまいました。

わたしが自分でふさわしいかどうかを判断するのではなく、自分ではふさわしくない、と思っても、主イエスが「来たれ」と招いて下さる以上、その招きに素直に応えることが信仰である、とその時、改めて示されました。キリストの招きが、第一であり、わたしの判断ではないからです。

#### エピソード⑧

「牧師はサンドイッチマンだ」。それがその牧師の口癖でした。商店街や町のにぎやかな通りをサンドイッチマンが歩いていた時代です。牧師を見て「人々がゲラゲラ笑ってもいい。前と後ろにぶら下げたキリストという看板に目を止めてくれさえすれば」。その言葉にしみれました。伝道者の道からそれて行きかけた時に、わたしを引き戻してくれた言葉です。

これらのエピソードから、先にあげた三つのこと、いずれも皆様にとっては既に承知していることばかりですが、あえて申し上げます。信仰の成長と育成のためには、礼拝を守ること、聖書を読むこと、祈ることの三つが不可欠です。そしてこの三つのことを主イエス・キリストと結び付けて受け取ること、これが本日のポイントです。

これらの三つには、戦いがともないます。戦いの相手は、キリストを信じておられない方々ですが、同時にわたしたち自身が相手です。いちばんやっかいな相手がわたしたち自身だからです。

戦うためには武器が必要です。わたしたちにとっての武器は、神の言葉です。エペソ6：10以下。真理の帯、正義の胸当、平和の福音の備えを足にはき、信仰のたて、救のかぶとをかぶる、⇒ これらはすべて防御のためです。武器は御霊の剣、すなわち神の言です。この武器は、相手も切りますが、同時にわたしたちをも切ります。

わたしたちは聖書の研究をするわけではありません。わたしたちの願いは、聖書に聴くことです。いわゆる聖書の研究は、あたかもわたしたちが上にいて聖書を調べることです。聖書は古典として人類の大切な文化遺産でもありますから、文献学の対象として取り扱うことができます。聖書研究は大切ですが、しばしば研究が目的になりやすいのです。しかし、ここでは聖書を神の言として受け止め、聖書に聴くことを目指します。聖書の言葉に聴きましょう。「聞く」よりも、「聴く」の方がふさわしいでしょう。

#### 一、聖書を読みましょう。

わたしたちの信仰の土台は、聖書です。

聖書が基礎であり、いちばんの土台です。土台としての聖書を正典と呼びます（聖典ではありません）。正典（カノン）＝その上にわたしたちの一切がかかっているものです。しかし、聖書は人間によってまとめられ、何百年にわたって伝承されてきましたので、誤りもあれば、矛盾する表現もたくさんあります。しかし、ヘブライの人たちは、枝葉のことにとらわれることなく、聖書の言いたいことを正しく受け取りました。

磁石は北を示しますが、たえず揺れ動いています。磁石が揺れなくなったら、その役目を果たすことはできません。揺れは、わたしたちです。それでも、キリストを指し示すことができます。わたしたちの揺れを用いてでも、聖書は正しい方向をさし示しています。

また、聖書は社会学の本でも、ましてや自然科学の本でもありません。聖書と科学はまったく矛盾しません。キチンと証明されるものが科学的事実です。証明されることを信じる必要はありません。理解し、知識として受け入れればいいのです。しかし、神がおられることや、主イエス・キリストの出来事は、わたしが信じなければ、わたしのものにはなりません。

聖書は信仰を生み出します。また、このキリストへの信仰がさらに、聖書を正しく理解させてくれるのです。聖書がわたしたちの土台であるという意味は、聖書が主イエス・キリストを明らかにしてくれるからです。聖書がキリストを明らかにし、そのキリストが聖書をさらに深く理解させてくれます。

**聖書という土台の上に立てられたものが信仰告白（信条）です。**

聖書が信仰告白を生み出しました。プロテスタント教会だけでなく、全世界のキリスト教会が受け入れている信仰告白が四つ（世界信条とも基本信条とも呼ばれている）あります。二ケア信条、カルケドン信条、アタナシウス信条、使徒信条の四つです。

「日本基督教団信仰告白」は「代々の聖徒と共に、使徒信条を告白す」として、前文で今までの教会が受け継いできた大切な信仰（三位一体、キリストの贖い）と、宗教改革によって確立された、「聖書のみ」「信仰義認」「万人祭司」を告白しています。わたしたちの信仰を短い言葉でまとめている、世界でも数少ない簡潔な信仰告白です。

信仰告白（信条）は言葉による神への讚美歌です。告白の相手は主なる神です

**聖書が生み出した信仰告白（信条）が、聖書を正しく理解させてくれる道具になります。**

聖書が信仰告白を生み出し、信仰告白によって、聖書が正しく理解される。このサイクルが大切な道筋です。

これは、教理の大切さ、ということです。教理というと、誤解されやすいのですが、アブラハムたちの信仰のあり方から受け止めたいことは、信仰のしたたかさ、ということです。アブラハム、イサク、ヤコブに代表されるイスラエルの父祖たちは、素直な信仰の持ち主であったと同時に、したたかな信仰も持っていました。神を信じていない人々との間に生きていかなければなりません。異教の人々の中で信仰を貫くためには、神への強い信仰と、礼拝を守ることが絶対に必要でした。それこそ「へびのように賢く、はどのように素直」（マタイ10：16）と言われるあり方が求められます。教理というのは、祈りを支えるもの、礼拝を支えるものです。このしたたかさは、わたしたちの

身についたものでなければなりませんし、したたかさを身につけるには、礼拝に出席し続けなければできません。

しかも、教理は一回学んだから分かるというものではありませんし、知識として知っている、ということだけでは、役に立ちません。聖書を読み続けてこそ、礼拝を守ってこそ、また祈ってこそ、身につくものです。

ここでは、使徒信条、また教団信仰告白の言葉の一つ一つについて申し上げることはできませんが、二つのことについてご一緒に考えて見ましょう。

**質問、使徒信条「我は天地の造り主、全能の神を信ず」の箇条を説明するのに、聖書の中のどの箇所を選びますか。**

・天地創造について、創世記1章がまず頭に浮かびますが、それで答えになりますか。

ヒント、キリストの出来事と天地創造がつながっているということです。

・「全能の神」を説明する言葉として、聖書のどの箇所を挙げますか。

ヒント、神の全能とは、愛することにおいて全能、赦すことにおいて全能、ということ。

信仰告白や使徒信条の言葉の一つ一つを、このようにして受け取っていくことが大切です。信仰の訓練としてもお奨めしたいことです。

聖書通読を志す方がたくさん出てくることを願っています。聖書通読の目的はズバリ、わたしたちの信仰をわたしたちなりに言いあらわすことができるためです。

日本人は、儒教の影響で、上帝、天帝などで、神が上におられることは受け入れることができます。また、わたし（自我）も分かります。神と我とは分かるのですが、なぜそこにキリストがおられないといけないのか、ましてや、聖霊となると分からなくなります。ひとことで言うと、三位一体については理解不可能であり、信じることもできないのです。これが分からない、ということは、罪の赦しも信仰義認もあやふやになります。

キリスト教教理の中でも、復活、聖霊以上に日本人に受け入れられないのが、ひとつはこの三位一体、もうひとつが信仰義認です。中でも、三位一体は、明治の中頃、ユニテリアンの教えが入ってくると、簡単にそちらになびいて行きました。三位一体についての確固としたものが形成されていなかったからです。

三位一体の神として表現するしかないのがわたしたちの信じる神です。父なる神としてわたしたちを創造し、わたしたちの罪を主イエス・キリストとして贖ってくださっただけでなく、その恵みを聖霊としてわたしたちが信じるように働いてくださる神、言葉として表現すればそうなるでしょうが、それを教会生活、わたしたちの信仰生活の中で具体化していく必要があります。

もう一つの、信仰義認についてはここでは触れませんが、わたしなりの言葉で言いかえれば、神のえこひいきです。わたしたちは神のえこひいきで選ばれ、救われています。

だから、有難いのです。

聖書が基本です。宗教改革によって、わたしたちプロテスタントは始まりました。聖書中心、信仰義認、万人祭司の三つが基本と言われていました。しかし、わたしたちは、聖書主義ではありません。例えば、洗礼を受けていない人に聖餐式にあずからせることの是非をいう時、かならず出てくるのが、聖書にはそんなことは書かれていない、という論議です。三位一体についても、書かれていない、と散々言われてきました。

ある方にこうお勧めした。その方は、やがてご主人と一緒に田舎に移って、ご両親と一緒に生活することが予定されており、そうすると、礼拝出席も難しくなることが予想されます。その方に強く勧めました、聖書を読もう。あなたの信仰が続けられるために。

## 二 礼拝を守りましょう

何故、礼拝を守るのか、

「アブラムは、彼に現れた主のために祭壇を築いてた」(創世記12:7)。さらに12:8にも、13:18にも「祭壇を築いた」という言葉が出て来ます。すなわち、礼拝の場所を設け、礼拝したのです。それがアブラムの戦いであり、信仰のスタイルです。

ところが、創世記12章の後半、アブラムがエジプトに滞在した記事では、「主のために祭壇を築いた」の文章はなく、だからこそ、危機に陥ります。この言葉が再び出てくるのは、創世記13:18になってからです。祭壇を築かなければ、アブラムには命の危険さえありました。

また、出エジプトの目的は「三日の道のりを荒れ野に行かせ、主に犠牲をささげ」るためでした(出エジプト記3:18)。エジプトの王ファラオがどうしても理解できなかったこと、それはなぜそれほどまでに礼拝にこだわるか、ということでした。

「自分の体を神に喜ばれる聖なるいけにえとして捧げなさい。これこそ、あなたがたのなすべき礼拝です」(ローマ12:1)。

何故礼拝するのか、と言えば、それがわたしたちの造られた目的だからです。安息日は、まさに神の安息につながっていくことです(創世記2:3、出エジプト記20:8以下)。わたしたちの場合にも、何故礼拝するのかを理解してくれない人がわたしたちの周囲にたくさんいます。年を重ねて礼拝出席が困難になった時、「お医者さんに行くのはいいでしょう。しかし、そんなお体で教会に行って、何かあったら、周りの方に迷惑をお掛けするのではありませんか」。まるで、教会なんかに行かなくてもいい、と言わんばかりの言葉です。礼拝なんかやめときなさい、という声の大合唱です。

祖父は、戦争中、また戦後、材料の入手困難と銅製品の供出で和菓子造りができなくなり、檜の皮を採取する仕事に従事しました。雨の日は、縁側で一日中、のこぎりの目立てと鑿やカンナの刃を研ぐことをしていました。目立ての終わったのこぎりや研ぎ終わった鑿やカンナの刃を油紙で大切そうに包んでいました。「これは(鑿やカンナに)お休みをさせるためだよ」と側にいるわたしに語ってくれました。これが安息です。わ

たしたちは礼拝に出て、神の言葉で目立てをしてもらい、よく切れるように研いでもらうのです。

礼拝の守り方については、わたしがあれこれと申し上げるよりも、本当なら皆さんからどのようにして守っておられるのかをお聞きしたいところです。礼拝を守りたい、という熱心な思いがあったとしても、老齢になり、体が言うことを聞かなくなると、それができなくなることが多くなります。教会への交通手段が段々になくなっていく、免許証の返上やら、歩行困難、教会までの道のりの険しさ、どれ一つをとっても、難しい問題ばかりです。その中で、どのように生活を整え、どんな準備をして、礼拝を守るか、お互いに語り合えたら、と願うのですが。

礼拝の守り方、遅れないように。その姿勢を示すことの大切さ。

これについては、昔から言われてきていることを繰り返すだけで十分かもしれません。遅れてはならない、しかし、もし万一、遅れそうになったとしても、遅れてでもいいから礼拝を守れ、と言われてきました。また、礼拝の準備は一週間前から始まります。土曜日には、明日の礼拝に行く備えをしておき、聖書讃美歌はカバンに入れて、献金も用意しておいて、すぐ飛び出せるようにしておき、当日は、財布とミルクを入れればいいだけにしておきなさい、等、赤ちゃんを抱えた教会員に、先輩の婦人たちがアドバイスをしているのを側で聞いたことがあります。

### 三 祈りましょう

何故、祈るのか、これは誰に対して祈るのか、ということと共に、考えなければならない事柄です。

エピソード①にあげたように、わたしは祈れませんでした。祈ったって、誰が聞いてくれるのか、と醒めた少年でした。そのわたしが、祈れる、ということは本当にうれしいことでした。祈りは、明確に、キリストと結びつきます。キリストと結びつかない祈りは、祈りとはなりません。

何故祈るのか、神が祈りを求めておられるからです。有名な、テサロニケー5：16～17の箇所を挙げるだけで十分でしょう。

わたしの祈りは、神に食って掛かる祈りです。神の胸ぐらを掴んで、神様、なぜですか、と神に食って掛かる、それは不信仰ではありません。神を信じるからこそ、そのように祈るのです。

神さま、なぜこんなむごいことをなさるのですか。信じられなくなります。わたしが信じなくなってもいいのですか、そう、神様に食って掛かったことが何度もあります。いえ、今でもそうです。

讃美歌310番「しずけき祈りの時はいと楽し」。



主イエスが、わたしたちの中の最も悲惨な現場にわたしたちよりも先に赴いてくださり、祈っていただきます。わたしたちはそれを信じて祈ることができるのです。

大きな事件が起きた時のことです。

「こどもが、神様がいるのに、なぜこんなことが起きたの、と聞いてくるのです。そんなことは牧師先生に聞きなさい、と言ったのですが、どう答えたらいいのですか」。

「お子さんは、理路整然とした答えを求めているではありません。こんな悲しい事件の中で、お母さんであるあなたがどう信じているのかを知りたいのです。あなたの姿勢を見せてやってください。こうお答えになったらいかがですか。お母さんにも分からない、でもお母さんは神様を信じて祈っているの。神様がきっとその人をお支えくださると。あなたにも神様に祈る人になってほしいの、と」。

### 信仰の骨格を造りましょう。

最後に、E. ブルンナーが大戦末期にしたヨハネ黙示録の説教からの一節を紹介しましょう。ナチスに協力する教会の動きもあって、福音を貫こうとする教会が苦しんでいた時代です。逮捕される人、獄中で死を迎える教職や信徒も出て来ました。

「皆さんは、その時の備えができていますか。聖書も讃美歌も与えられず、獄中で過ごすという備えが。その時のために、聖書の言葉を心に蓄えましょう。讃美歌をそらで歌えるように、覚えましょう」。

この言葉で、使徒言行録16章、フィリピの牢獄でパウロとシラスが神に祈り、讃美歌を歌い続けた、というエピソードです。真っ暗だったはずですが。

この言葉は現代にも通じます。老人になったわたしにはことのほか響いてきます。もしかしたら、施設で暮らすかもしれません。病院で過ごすかもしれません。聖書も、讃美歌も持参できないかもしれません、いや既にそうなっているかもしれません。

聖書の言葉を心に蓄えましょう。讃美歌を覚えましょう。

歩いて訪問できる間に、信仰の友を訪ね、電話をかけ、励ましましょう。その友のためだけではなく、電話をかけるわたしたちも励まされるのです。古い、大切な共に手紙を書きましょう。

皆様の上に神の祝福を祈ります。